

十二月の新国立劇場シェイクスピア悲劇 『ロミオとジュリエット』観劇記

外国語学部英語英文学科 郷ゼミナール

外国語学部 英語英文学科3年 阿部 凜

わたしたちは外国語学部英語英文学科郷健治教授のゼミナールで十六世紀末のイギリスの劇作家ウィリアム・シェイクスピアの作品を学んでいる。二年次の大学の授業でも郷先生の元で『から騒ぎ(Much Ado About Nothing)』という作品に触れていたのだが、今年(2024年)は郷先生のゼミナール(通称「郷ゼミ」)の元で楽しみにしていた作品『ロミオとジュリエット(Romeo and Juliet)』を一年かけて学ぶことができた。そして十二月に初台の新国立劇場にてシェイクスピアの悲劇『ロミオとジュリエット』の新国立劇場演劇研修所第18期生公演を郷ゼミ3年生14人で観劇した。



新国立劇場

自分自身、郷先生の引率でシェイクスピアの劇作品を観劇したのはこれで三回目である。一回目は八月にあつたイギリスでの海外文化研修(SEA2)プログラムで、ロンドンの本場グローブ劇場で観劇した『から騒ぎ』。二回目は十一月に郷ゼミの課外活動として明治大学駿河台キャンパスアカデミーホールで観劇した第21回明治大学シェイクスピアプロジェクト公演作の『お気に召すまま』。そして、三回目が今回の『ロミオとジュリエット』である。この3つの作品はどれもシェイクスピアの作品であるが、『から騒ぎ』と『お気に召すまま』は「喜劇」であり、『ロミオとジュリエット』は「悲劇」というジャンルに分けられる。「悲劇」というものは最後には「死」に結びつくのだが、今回観劇した『ロミオとジュリエット』は今まで観たシェイクスピア劇とは大いに違い、衝撃を受けた。どんなものだったのかを説明する。

今回は悲劇である『ロミオとジュリエット』の観劇だったが、前回観劇した喜劇である『お気に召すまま』とは対照的になっていて、喜劇と悲劇

の違いが明白だった。『お気に召すまま』では舞台の装飾や衣装、小物などたくさんものを使い、物語の雰囲気、場面展開がどんな人でもわかりやすいようになっていた。しかし、今回の新国立劇場小劇場での『ロミオとジュリエット』では、服装はみな似たようなものでデザインが少しだけ違っていている程度で、それ以外は舞台装飾は照明、クリスマスツリーに飾ってあるようなライトだけ。初めは小劇場の真ん中の空っぽのステージだけでどう表現していくのか気になったのだが、むしろ、無駄がない状況で役者の演技がより際立ったと思った。そして、メインだと思っていた“ロミオ



新国立劇場小劇場アリーナ



新国立劇場『ロミオとジュリエット』公演ポスター

とジュリエットの恋の始まり“はいつ来るのか”と
思っていたら、初めの場面では授業で習ったこと
のなかった台詞、演出があり、それこそバイオレ
ンスに表現されていたため、自分が知ってきた『ロ
ミオとジュリエット』ではないと感じた。また、
”恋に落ちた2人の心が踊る出会いの場面”も、
キスシーン、ベッドシーンなども最小限で、その
代わりに、敵同士の激しい争いを強調していた。
そのような演出のおかげで、どんなに家族が憎い
敵であっても、それでも相手を無我夢中で求め、
愛し合っている若者の気持ち強く感じた。私が
知っている”愛”とは違う次元の激しい”愛”を
見つけてしまったと思った。

また、今まで観たことのなかった、二つの場面
を同時に演じるというやり方。ここでは初夜を迎
えたロミオとジュリエット、そして、キャピュ
レットの人たちの会話であったのだが、ひとつひ
とつ演出をするより、同時に演出した方がより一
層物語に夢中になれることからとても賢い方法だ
と思った。個人的に一番好きな場面は、舞踏会の

場面がデイスコ風に表現されていて、役者たちの
踊り方がひとりひとり個性があり、ライトを使っ
て時が止まったかのように表していたのを観た時
で、鳥肌が立つくらいよかった。そして、いちば
ん驚いたのが、ジュリエットの父親キャピュレッ
ト役を演じた男性で、敵に対して暴力的でもある
が、娘を想う優しい父親、しかし反抗されると力
で相手をねじ伏せる。敵のモンタギューへの憎し
みなど、どれも”素”なのではないかと疑うほど
役に入っていて、役への愛を感じた。最後に全体
的に言えることは、自分が知っている『ロミオと
ジュリエット』とは違うバイオレンスさ、過激さ
があって、舞台上で小道具さえもほぼ使わないこ
とによって役者ひとりひとりの演技が際立ち、ど
の場面も飽きずに無我夢中で
観ることができた。結末がわ
かっているが、自然と涙が
出て感動もした。そして、最
後の場面で役者たちの「あり
がとうございました！」を聞
くまで、息を吸うのを忘れる
くらい夢中になっていた。



ロミジュリを観劇した郷ゼミ3年生

で予習し、考察をまとめる。それを郷先生にみて
もらい、授業で詳しく作品に触れさせてくれたお
かげで、『ロミオとジュリエット』は”恋に落ちた
若者”だけの物語ではなく、恋愛だけではない意
味のある深い物語であり、人々に愛されてきた理
由などもよくわかった。そして、今回『ロミオと
ジュリエット』を演じた若者たちに対して、同じ
くらいの歳の人たちがここまで演技だけで迫力の
ある演出ができたこと、そのために沢山稽古して
きて、劇以上のものを”完成させている”とい
うことに感動した。私は郷ゼミに入ってから感動さ
せられたばかりであったが、今回もこの劇を完成さ
せた彼ら新国立劇場演劇研究所の第18期生たち
には圧倒された。